

平成26年度
入学試験問題（第二回）

国
語

注意事項

- ※ 問題冊子は17ページまであります。
- ※ 試験時間は50分です。
- ※ 開始の合図があるまで開かないこと。
- ※ 答えは全て解答用紙に書くこと。
- ※ 句読点やカギカッコは一字と数えること。
- ※ ページが抜けていたり、印刷が見えにくかったりした場合には、手を挙げて知らせること。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

「大人ってうそつき！」と恨みつぼく、非難する相手は、まず親でした。

私たちは、たいていの場合、生まれ落ちるとすぐに親と「仲間」になります。「親」と「子」の仲間関係とはどんなものなのか、よく考えてみましょう。

この関係の特別な点は、すくなくとも二つあります。

5 一つ目の特徴は、無理やりつくられてずっと続く仲間関係だということです。「仲間になりたい？」などと一度も聞かれることなしに、です。

① 芥川龍之介という作家の『河童』^{かわこ}という小説があります。ここではおなかの子どもに、「生まれてきたい？」と聞き、子どもがこの世の中やこの親のもとではいやだという理由で「生まれたくはありません」と答えると、生まれないですむという話が出てきます。

10 でも、今の人間の世界ではそれはできませんから、人間の子は希望を聞かれることもなく、生まれてきてしまうのです。そこで、中学生ぐらいになって、親とけんかすると、激怒のあまり「 」と叫ぶことにもなるのです。

そのうえ、この親子関係は、ずーっと続くのです。もしこの関係をやめようとしたら、大騒ぎになります。どちらかの家出ということになるほかないでしょう。

15 海がめなら大丈夫です。生まれたとたん、まっすぐに海に向かい、親なんて探もしないからです。でも人間の場合は、たとえ家出しても、世の中の人は、親子関係がなくなったと認めてはくれないでしょう。そのくらい、この関係は「強固な」仲間関

係だと言えます。

20 何の能力もなく生まれてくる人間の赤ちゃんにとつては、この関係は、必要不可欠なものなのです。③そして、赤ちゃんから子どもになっても、人間の子どものできることはまだまだ限られています。子どもだって、成長するにつれいろいろな力を発揮できるようになっていきますが、動物の子どもたちと比べれば、はるかにゆつくりとですし、人間には学校というところがあることからもわかるように、人間は大勢の大人から時間をかけていろいろなことを教えてもらって、やっと一人で生きていけるようになるのです。

20 言ってみれば人間の親子という仲間関係は、できたときから、新参者である新しい一員のめんどうをみることが大きな目標だったのです。この大きな目標によつて、赤ちゃんだったあなたたちは大きくなれたのです。④

25 でも、人間はいつまでも元気というわけにはいきません。若いときは風邪ぐらいしかひいたことのないような、うらやましいくらい元気印の親でも、かならず歳はとります。歳をとれば誰でも、たとえ病気でなくても、手足が若いときのように自由に動けなくなるし、頭の回転は鈍くなるし、物忘れをするようにもなります。そして、あなたはそこ、すっかり大人になります。⑤

30 このとき、親子という仲間関係で、立場の逆転が起こるのです。あなたたちが、今までめんどうをみてくれていた親たちの、めんどうをみる側に回るといふことです。この「立場逆転」が親子という仲間関係の二つ目の特徴ということになります。

「うそつき！」と言葉を投げかける相手がまず「親」になる理由は、「親」はあなたたちの「めんどうをみて」くれるはずの人だからです。

「めんどうをみる」こと」のうちには、これをしなさい、あれはしてはだめという、指令を出すことも含まれています。あなたたちが無事にここまで大きくなれたのも、めんどうをみてくれる大人が、ごはんを作ってくれるからだけではなく、指令を出し

35 てくれて、それに従って、生きてきたからなのです。

指令には、「これをするのはいいことだ、あれをすることは悪いことだ」という、「よい」「悪い」という言葉が隠れていいます。「宿題をしなさい」という指令には、宿題をするのはいいことだ、テレビを見ること、遊びに出かけることは悪いことだ、という意味が隠れているのです。

40 そして、実は、人間は、子どもも大人も、この「よい」「悪い」、「何がよくて何が悪いのか」に従って、こんどはこれをしよう、あれをしようと自分のすることを決めていたのです。そして、これからも決めていくのです。

子どもは、親の出す、「よい」「悪い」という指令に従って生きていきます。⑤、年月が過ぎると、世話をする側がされる側になる日がやってきます。ということは、指令を出す側が出される側になるということです。

45 そうなるのは、若いあなた方には、まだ何十年もあとのことでしょう。でも、この逆転の芽はもつと早くから芽生えているのです。外に出るなら、帽子をかぶりなさいと言われて、やだ！ と拒否した、ほんとに小さな子どもときからです。この炎天下、帽子をかぶるのはいいことだと言う大人に、「それはめんどうで、イヤ」、⑥ 悪いことだ、と子どものほうは思っただけで、通そうとしたときに、です。

いろいろ指令を出してくれる親に従って、子どもは大きくなります。そしてある日、親の指令と違うことをしたくなるのです。大人はこれを子どもの反抗ととらえて、「うちの子、もう反抗期なのかも」と言うかもしれません。でも、これは、後に起こる ⑦ 準備のための反抗でもあります。

50 大人の指令に文句を言わず従っていたころから一歩前に進み、成長したのです。親の「よい」「悪い」に自分なりの反応を持つようになったのです。そうになると、親って何を言うのだろうと親の言うことにもっと耳をすまします^⑧ようになります。

耳をすましてみるともつと気になることが出てきます。親が昨日出した指令と今日出した指令、自分に出す指令とお兄ちゃんに出す指令が違っていたりするのです。そうになると、親の出す指令だけではなく、親以外に自分に指令を出してくれる人、つま

り学校の先生の指令まで気になりだします。

55 それでも、今まで自分のすることを決める尺度^⑨になってくれていた大人に対する敬意は、そうそうあっさりとなくなるものはありません。敬意がなければ、わざわざ、「うそつき！」なんて思いませぬ。今まで自分のために「よい」ことを言ってくれていたはずの大人である親からの指令——「勉強しなさい」「野菜も食べなさい」「ものを大切に」「うそをつかないで」——。

親や先生は、自分たち子どもの安全のために「よい」ことを言ってくれている、だから親や先生の言うとおりにしよう——心のどこかで、子どもは実はそう思っていた、だから親を信じてここまでついてきたのです。それなのに、その信頼を裏切つて！ という思いがあつての「うそつき！」なのです。

60 だから、いつもめんどろをみてくれるわけではない相手、指令の出し手ではない相手、信頼の思いを心の底で抱いていなかった相手には、その言葉を言わないのです。ですから、親と先生がまず「うそつき！」という言葉の対象になるのは当然のことです。

「うそつき！」と大人をなじむということは、敬愛する大人がいるということですし、大人の言うことに対しておかしいぞと
65 思えるほど大きくなった自分がいるということなのです。それは、何をするかは自分で決めたいという、自由への熱情をちゃんと持っているという、人間であることのしるしでもあるわけです。

だから、大人のうそに文句をつけたくなったら、文句をつけつつ、自分が成長していることに乾杯^⑩、といきましょう。

（左近司祥子『なぜねこは幸せに見えるの？——子どものための哲学のおはなし』（講談社）より）

問 1 ——線部①「芥川龍之介^{あぐたがわりゅうのすけ}」とありますが、芥川龍之介が書いた作品を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 雪国^{ゆきくに}

イ 杜子春^{とししゅん}

ウ 人間失格^{にんげんしっかく}

エ 吾輩は猫である^{わがはいはねこである}

問 2 [②] に当てはまる言葉として文脈上最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 親子の縁を切ってやる
イ この家から出て行ってやる

ウ 生んでくれなんて頼まなかった
エ 生まれたいって言わなきゃよかった

問 3 線部③「この関係は、必要不可欠なものなのです」について。

I 「この関係」とは、具体的にどのような関係ですか。その説明をしている部分を本文中から十五字以上二十字以内で抜き出しなさい。

II なぜ「必要不可欠」なのですか。その理由を、二十五字以内で説明しなさい。

問 4 線部④「新参者である新しい一員」を本文中の別の一語で言い換えなさい。

問 5 [⑤] ・ [⑥] に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア では イ だから ウ それとも エ たとえば オ ところが

問 6 [⑦] には、筆者の考えに従えば、どのような言葉を入れるのが適切ですか。「指令」「逆転」という言葉を必ず使って、二十字以上三十字以内で答えなさい。

問 7 線部⑧「耳をすます」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 遠く離れた音や言葉を聞く
イ 逆らわずに言われた通りにする

ウ 気持ちを集中させて注意深く聞く
エ 間違っているのではないかと疑う

問 8 — 線部⑨「尺度」を別の言葉に言い換えるならば、何が適切ですか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 規準 イ 機関 ウ 主張 エ 効用

問 9 — 線部⑩「乾杯」とはどのような意味で使われている言葉ですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 責任を自覚しよう、ということ。 イ 喜んで祝福しよう、ということ。
ウ 冷静に受け止めよう、ということ。 エ ふさわしい行動を取ろう、ということ。

問 10 本文中の筆者の主張に、内容的に合致しているものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分の面倒を見てくれて敬意の対象になっている人が言う言葉は、要するに強い力を持った指令であり、子供の素直な気持ちに従えば、そういう言葉にはどうしても逆らいたくなる。
イ 自分の面倒を見てくれて敬意の対象になっている人とは、何でも言い合える理想的な関係になるので、批判的な「うそつき！」という言葉も、他の人に対してよりは言いやすくなる。
ウ 自分の面倒を見てくれて敬意の対象になっている人は、将来は自分が世話をしなければならなくなる人なので、その人が嘘うそを言っているかどうかをしっかりと見抜かなければならない。
エ 自分の面倒を見てくれて敬意の対象になっている人が何を言うかはとても大切なことなので、そのような人が嘘を言った時は、他の人が嘘を言った時以上に重大なことに感じられる。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

小学六年生の立石美楽は、山奥の峯川村にある高校で臨時教員をすることになった父親と一緒に、一年間限定で、東京を離れて峯川村で暮らしている。仕事が忙しい母親は東京に残っている。美楽のクラスには、高田麻衣や、村の主産業である林業を取り仕切る川越林業の社長の孫・川越優美らがいる。

音楽会が近づいてくる。わたしの弾く木琴は、へこへこ芯のない音をたてている。それでも、ようやく三度に一度はタイミン
グが合うようになった。

練習のあと、同じ方向の麻衣といっしょに帰るようになった。こいつはクラス一のおしゃべり娘だから、こっちがしゃべらな
くていいので楽だ。

5 「立石さんって、ほんとにおとなしいよね」

おまえがしゃべりすぎなんだ、と思うが、もちろん黙っている。

①「東京から来たって、信じられないよ」

一学期にもいわれたぞ。あの時は、内心ムツとした。でも、今は不思議と少しも腹が立たない。

「ぜんぜん違うでしょ、こことは」

10 「人の数がね」

「だよねえ。やっぱりだんだん人が減ってくし。いともね、東京に行っちゃった」

「高田さんは、ずっとここにいるの？」

15 「さあ。高校は M 市かな。やっぱさ、銀高^{注1}には行く気にならない。高校はバスとかで通いたい。で、高校出たら、峯川^{みねがわ}を出ることになるんだろうな。大学も専門学校も、通えるところにはないし。就職だって、この近くじゃ、優美んちぐらいだし。優美はいいよね。跡継ぎだから、何の心配もいららないんだ」

② それが優美にとつていいのかは疑問だけど、とりあえずうなずく。

「川越さんて、昔からジャージで登校しているの？」

「去年からだよ。前はふつうだった。っていうか、低学年のころはさ、一人でお嬢さまみたいなかっこうしてて、でもそのころって、まだうちらもガキで遠慮とかないから、みんなで、川越さんの服は変です、なんていったりしちゃったけど」

20 麻衣はくふつと笑った。

「家でもジャージなのかな」

と聞いてみる。実はそうじゃないことはわかっていたけれど。

25 「さあ。優美つてさ、うちのこととか、あんまり話さないんだよね。でも、学芸会とか音楽会とか、行事がある時には、決めてくるよ。だからそういう時に、お嬢さまなんだなって、思い直すの。特別な子って感じ。どこにいても目立つし、しっかりしてるし、頭もいいし、レベルが違うんだ。きつとさあ、大学なんかは、レベルの高いお嬢さま学校とかで、それから名士のツマか何かになるんだろうな。でさあ、うちら、今は、優美、なんて呼んでるけど、大人になったら、川越の奥さま、なんて呼ぶんだよ、それで選挙……」

と、麻衣の想像がふくらんでいくのを、わたしは珍しく遮^{さへぎ}った。

「川越さんの家って大きいよね。行ったこととか、ある？」

30 「そりゃあ、あるよ。この村で行ったことない人はいないんじゃないかな。うちだつて、川越林業の社員つてわけじゃないけど、でも、野菜とか出荷するのに、優美の家の会社が関係するから、正月とか、挨拶^{あいさつ}に行くし。川越家に縁のない人間なんて、

峯川にはいないと思うよ」

35 川越林業はほかにも系列会社を持っている。建築会社に運送会社などなど。その元締めが、優美のじいさん^{もとじ}ってわけだ。麻衣の家は、おやしさんは隣町まで働きに行っているが、たしかおふくろさんとじいさんとばあさんは農家だから、それでお世話になっっているのだという。

「あ、立石さんちは、優美とはしがらみないもんね」

④ しがらみなんていった自分の言葉が、おかしかつたのか、麻衣はまた、くふつと笑った。

「お嬢さまの部屋ってすごいのか？」

「え？ 優美の部屋までは入ったことないよ。お誕生日会やった時だって、大広間だったし」

40 「おーひろまー？」

思わず声がうわずった。ふつう、そんなものは家にないだろうに。まあ、あれだけ廊下^{ろうか}も長かったから、大広間の一つや二つあっても、不思議はないのかもしれない。

「今年もたぶん、一月に優美の誕生日会やると思うから、きっと見られるよ。クラス全員ご招待だから」

わたしは、優美のことがさっぱりわからなくなっていた。教室での優美は、クラスのリーダーで、だけど、別に煙たがられてもいないし、ほかの子たちとも仲がいい。親しいといえない女子は、わたしぐらいだろう。だけど、麻衣は優美の部屋には入ったことがないという。なぜ、わたしを部屋に入れたのかといえば、秘密^{注2}のブツの受け渡しがあったからだ。

つまり、わたしは優美の秘密を握ったのだ。なりたいたいもの、一番星。最初に聞いた時は、なんじゃそりや、と思ったけれど少し考えればわかる。優美がなりたいたいののは、女優だと思う。

50

《 中 略 》

「何かさあ、最近のミラクって……」

と、いきなり麻衣がいった。気がつくとかクラスの女子がわたしを呼ぶ時、「立石さん」の間に「ミラク」が交じるようになっていた。そして、わたしは女子の何人かを、名前で呼ぶようになっていた。

55 いつからだか記憶にない。たぶん音楽会の前後からだろう。

「何だよ、麻衣、最近のあたしがどうしたっていうの？」

「峯川の景色にとけ込んでいるっていうか、このまま、ずっといっしょに、峯中に行くみたいな気がしちゃう」

「前は違ったんだ」

60 「うん、お客さまって感じかなあ。うちらだって、ミラクは、東京に帰るって思っていたから。そのわりには東京から来たって感じじゃないってことはあったけど、やっぱり、峯川の子、っていうのとは違ってたよね。だけど最近はさあ、何か自然だよねえ、ここにいて。でも、中学、いっしょじゃないんだよね」

麻衣の表情がちょっと寂しそうで、わたしは少しうろたえて、⑥ だけど何となくこそばゆくて、ほんのりと嬉しかったのだ。

わたしが「立石さん」ときどき「ミラク」に変わったところ、⑤ 優美の視線がやわらかくなった。その優美が、注 紀香と話している。優美は少し嬉しそうに笑っている。ははん、注 運試しがうまくいったのか、と思ってみていると、ちよつと来いというふうに顎をしゃくった。やっぱりこいつには逆らえない。気が小さいと自分でも思う。

廊下の隅で、優美が小さな声でいった。

「あのこと、だれにもいってない？」

こくりとうなずく。

「書類選考、通ったの」

70

「そりゃあ、通るでしょうよ」
あんたが通らないで、だれが通る？

「そうかな。でも、ここまで。親に認められるわけないから、面接には行かない。行けっこないし」
「ほんとは行きたかったんだ」

「別に。美少女っていわれたってしょうがない。あたしが望んでいるのは、そんなことじゃないし」

75

「……星だもんね」
「えっ？」

「女優になりたいと思ってるのかなって」

優美の眉がキツと「センチぐらい上がり、顔がぐっと近づいてきた。そしてわたしの腕を思いきりつかむと、怖い顔でいった。

「そんなこと、人にいったら承知しないからね」

80

「わかってる」

優美はようやくわたしの腕から手を離した。痛いぞ、ばか力め。

「……何で、そう思ったの？」

わたしが感じてること、口にしたら怒るかな。でも、いつてみた。

「演じてるじゃん、教室でも、家でも」

優美はまじまじとわたしを見た。それから、ふっと口をゆがめて笑った。

85

⑦「いいよね、東京に帰れるあんたは」

「へっ？」

「ほんと、にくらしいいったらない」

って、わたしのこと？ だよ。ほかにはいない。⑧

90 「上から押しつけるものも、足かせもない。ある日、ふらっとやってきて、当たり前みたいに、春が来たら東京にもどっていい」

そういわれても困る。けど、わたしは黙って優美を見つめる。また優美が口を開く。

「うんざり。ときどき、何もかも投げ出したくなる。山もスギ林も、見るのもイヤ！」

95 けど、見ないわけにはいかないぞ。ずっと目をつぶっていることはできない。目を開けてれば、どうしたって山が視界に入ってくるのが峯川だ。

「わかる？ わかんないよね。峯川なんて、どこもかしこも息苦しい。狭くて」

注5
「練馬より広い」

「面積じゃないでしょ。みんな、出ていく。出ていける人はいい。でもわかる？ あたしは跡取りなの。川越林業の。出ていく自由なんてないの」

100 ようやくわかった。一学期から、何でこいつにいびられたか。大発見だ。こんな何もかも恵まれているお嬢さまに比べたら、とりたてて取り柄とねもないわたしが嫉妬とどされることもあるんだ。ただ、東京にもどれるというだけで。だけど、何でだろう。無性に腹が立った。川越林業あつての川越優美だともいうのだろうか、これほど偉そうに振る舞うのが？ そんなはずはない。

⑨ 「別に、家を背負うこともないだろうに。カタツムリでもあるまいし。川越優美は川越優美なんだから」

⑩ いったから、まずい、と思った。優美が口を開く前に、思わず後ずさりする。でも、優美は、プツと吹いた。

105 「やっぱ、あんたって変」

はまのきょうこ
(濱野京子『木工少女』(講談社)より)

注

- 1 銀高ぎんこう——美楽の父親が臨時教員をしている、村内にある銀の星高校。
- 2 秘密のブツ——優美が取り寄せた、美少女コンテストの応募書類。ひよんなことから、美楽が優美の家に届けることになった。その時に、美楽は優美の部屋に通された。
- 3 紀香のりか——美楽たちの担任の亀山紀香先生。
- 4 運試し——美楽に対して優美は、美少女コンテストに応募することを「運試しよ」と言った。
- 5 練馬ねりま——美楽一家が住んでいた、東京都練馬区。

問 1 ——線部①「東京から来たって、信じられないよ」とありますが、麻衣は、どのようなイメージを持っていると考えられますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 東京の子供は快活で社交的だ、というイメージ。
- イ 東京の子供は音楽も体育も得意だ、というイメージ。
- ウ 東京の子供はお洒落しゃれで洗練されている、というイメージ。
- エ 東京の子供は競争心が強く目立ちたがり屋だ、というイメージ。

問 2 ——線部②「それが優美にとっていいのかは疑問だ」とありますが、なぜ「疑問」なのでしょうか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 経験もそれほど積んでいない若いうちから責任の重い立場につくというのは、周囲の人々が思っているほど楽なことではないだろうから。
- イ 将来性のない産業をそのまま受け継いでいくのは、他人の目から見ても大変なことで、これからの苦勞を考えると素直には喜べないから。

ウ 将来が決まっているということは、夢や可能性を実現させることも自分らしく生きることでも出来ない、ということもあるかもしれないから。

エ 人間的な成長には欠かせない、失敗という経験をすることが出来ないまま大人になってしまうかもしれない、それは本人のために良いことではないから。

問 3

——線部③「麻衣はくふつと笑った」とありますが、この時の麻衣の心情の説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 今でもあの時の服装を思い出すとおかしくて仕方がない自分に対してあきれてしまった。

イ 気に入らないクラスメイトの悪口を、当事を知らない転校生に言うことが出来て、すっきりした。

ウ 悪口を言い合っている、時間が経てば良い思い出になることが分かり、安心することが出来た。

エ 小さい頃は物事が分かっていたいなくて、今なら言わないようなことを平気で口にしていたのがおかしかった。

問 4

——線部④「しがらみなんていった自分の言葉が、おかしかったのか」について。

I 「しがらみ」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 利益を与えたり与えてもらったりする特別な関係。

イ 時間をかけて築き上げた、十分に信頼できるもの。

ウ いやおうなしに上位下位を決めてしまう一方的な関係。

エ まとわりついて離れず、自由な言動を奪ってしまうもの。

II 麻衣は、どうしておかしく感じたのですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答

えなさい。

ア 「しがらみ」というのは、小学六年生が使わないような大人の言葉だから。

イ 「しがらみ」という言葉の意味を、実は自分も全く分かっていなかったから。

ウ 「しがらみ」という、いかにもこの場にふさわしい言葉を選ぶことが出来たから。

エ 「しがらみ」という言葉を使ってみて、大人の世界のたいへんさを実感したから。

問5 — 線部⑤「自然だよねえ」とありますが、これはどういうことですか。ほぼ同じことを、たとえを使って言っている箇所を

本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問6 — 線部⑥「こそばゆくて」とありますが、この場合の「こそばゆい」に最も近い意味の言葉を次のア～オの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア やましい

イ このましい

ウ てれくさい

エ なさけない

オ ほこらしい

問7 — 線部⑦「いいよね、東京に帰れるあんたは」とありますが、この気持ちを本文中の別の言葉で言い換えると何になりますか。漢字二字で答えなさい。

問8 — 線部⑧「だけど、そいつは筋違いつてもんだろう」とあるが、美楽に言わせれば、何が「筋違い」だというのか。その説明をしている次の文の空欄に当てはまる言葉を十字以内で答えなさい。

《 》から、という理由だけで自分（美楽）のことを憎らしく思うこと。

問9 ——線部⑨「川越優美は川越優美なんだから」という言葉は、どのような意味で言った言葉だと考えられますか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア たまたま東京に家があるということだけで、その人をうらやましく思っても仕方がないだろう、という意味。
- イ 人間としての魅力があるかどうかが問題なのだから、家に財産があることなど関係ないだろう、という意味。
- ウ なりたいものになれないのを家のせいばかりしていないで、自分らしく生きてみたらいいだろう、という意味。
- エ せっかく素晴らしい自然環境のもとで生まれ育ったのだから、自分の家にだけこだわっていてもだめだろう、という意味。

問10 ——線部⑩「優美は、プツと吹いた」とあるが、それはなぜですか。理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 必要以上に真剣に自分のことを心配して手厳しいことを言ってくれている姿に、嬉しさと同時におかしさや不審さをも感じたから。
- イ いいことを言いながらも、変な比喻ひゆを使ったりしたおかしさに気づいて、まずいと思ってあわてる姿が、とてもユーモラスに見えたから。
- ウ 村の人々が口にしなくても分かっていることを少しも理解していなくて、的外れなことを堂々とやったことが、この上もなく面白く感じたから。
- エ 自分を川越林業の跡取りではなく一人の人間として見て、他の人が言わないようなことをはっきり言ってくれたことが、面白くもあり新鮮でもあったから。

三

あとの問いに答えなさい。

問 1

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 日本の農産品はフカ価値が高い。
- ② 新しい税制度をドウニユウする。
- ③ デントウ文化をしっかりと守ろう。
- ④ 市からホジョのお金が出る。
- ⑤ 社長が基本ホウシンを説明した。

問 2

例のように、空欄①～⑥に漢字一字を入れて、空欄の上と下とで二字熟語のしりとりを完成させなさい。

例 実——行——儀——式——典 実行、行儀、儀式、式典

羽	—	①	—	筆	—	②	—	番	—	③	—	織
治	—	④	—	全	—	⑤	—	作	—	⑥	—	務

問 3

上の熟語と下の熟語とが対義語の関係になるように、空欄に漢字一字を当てはめなさい。

- ① 収入 ↑ ↓ □ 出
- ② 子孫 ↑ ↓ 先 □
- ③ 悪筆 ↑ ↓ □ 筆
- ④ 消極的 ↑ ↓ □ 極的

